

氏 名：榊 恵 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 2 6 号

学位授与年月日：平成 1 9 年 3 月 2 0 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：精神看護学教員の学生とのインタラクションをめぐる体験
—看護教員のピア・グループの実践を通して—

THE EXPERIENCES OF PSYCHIATRIC MENTAL
HEALTH NURSING TEACHERS IN INTERACTION
WITH STUDENT NURSES : AN ACTION RESEARCH BY
PEER GROUP

論文審査委員：主査 武 井 麻 子

副査 守 田 美奈子

副査 筒 井 真優美

副査 濱 田 悦 子

副査 平 澤 美恵子

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景】

平成 9 年に看護師養成カリキュラムの中に「精神看護学」が科目として独立して以来、精神医療の状況も教員・学生をとりまく社会状況も大きく変わってきた。精神看護学を担当する教員は、経験もサポートも少ないまま、学生指導に苦慮しているが、その実態は明らかになっていない。

【研究目的】

精神看護学担当教員が自由に語り合える場を作り出すピア・グループの実践を通して、教員が教育の場でどのような体験をしているのかを明らかにし、教員が困惑する学生の傾向と、教員を取り巻く人間関係のありようを明らかにする。さらに、グループの流れと参加者の語りの変化に注目しながら、グループでのインタラクションを通して形成される教員同士の相互理解や信頼が、どのように参加者へのサポートになっていくのかを明らかにする。

【研究方法】

ピア・グループの方法を用いたアクション・リサーチ。精神看護学担当教員のピア・グループ「つどい」を隔週 1 回、金曜の夜 19 時から 90 分間、1 年 3 ヶ月にわたって開催した。研究者は同じ教員（ピア・メンバー）として参加しつつ、ファシリテータの役割を担った。

「つどい」での話し合いを録音し逐語録を作成、毎回参加者にフィードバックした。また、「つどい」開催のプロセスで観察したことを自分の感じたことを含めてフィールドノーツに記録した。毎回逐語録とフィールドノーツをもとにスーパーヴィジョンを受けながら、グループでのインタ

ラクションの分析を行い、そこでの解釈の妥当性を次回「つどい」で確かめるという円環的作業を繰り返した。

また、「つどい」終了後に、個別インタビューを行い、参加者にとっての「つどい」の意味について確認し、これも分析データとした。

【研究参加者】

関東近県の看護系の大学・短期大学・専門学校3年課程に勤務する精神看護学担当教員で、郵送による呼びかけに応えた者。

【分析方法】

「つどい」の逐語録およびフィールドノーツから、「つどい」で「何が語られたか」をエピソードごとにまとめ、そのテーマを抽出した。同時に、それが「どのように語られたか」を整理した。

さらに、「つどい」の経過および内容とインタビューの内容とを照らし合わせながら、「つどい」で語られた内容から精神看護学教員の体験を再構成し、「つどい」での語りの変化を見た。

【倫理的配慮】

郵送で参加者を募った際に、文書で研究の趣旨と方法、自由意思による参加、匿名性の保持などの倫理的配慮について伝え、さらにそれぞれの初回参加の際に、同様の内容を口頭で伝え、文書による同意を得た。また、逐語録に残して欲しくないという参加者が希望した内容については、記録から削除した。なお、本研究は、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の審査を受け、承認された。

【結果】

「つどい」は、参加者がいなかった3回を除き、計27回開催された。研究者を除く1回ごとの参加者は1～14名。平均2.7名であった。最多参加回数は17回が1名であった。

「つどい」でもっとも語られたのは、悩む学生との関わりであった。そこから、教員が学生には実習で「人としての患者」を理解して欲しいという期待をもち、学生が自分をふり返り悩むことにこそ実習の意味があると考えていること、悩みながらも何とか壁を乗り越えて欲しいと願っていることが明らかになった。

また、教員を戸惑わせる学生には、「患者の気持ちに鈍感」「自己中心的」「教員を信頼できない」「教員の評価を気にする」「人としての教員に関心をもつ」という傾向が認められた。

教員は、患者への関心と学生への関心のはざまで揺れ動き、問題の学生の複雑な家族背景に気づきながらも、そこに教員として踏み込むことに躊躇していた。さらに、激しく変貌する医療や教育の場で、教員は孤独と不安を抱えていた。

「つどい」では、共感的な雰囲気生まれていくなかで、各々の参加者が語られる登場人物に感情移入して反応を返すうちに、学生の理解、教員相互の理解、自己理解が深まっていった。

その結果、「厄介な学生」の物語が「ケアを必要とする学生」の物語として書き換えられるなどの変化が起り、参加者は、こだわりなくしゃべることのできる場としての「つどい」の意義を

見出していった。

【考察】

「つどい」で語られたことから、まず、教員を困惑させる傾向を、自己心理学でいう「自己愛傾向」という視点から分析した。

すなわち、早期の発達段階で自己愛の傷つきを体験した人間は、他者からの評価や賞賛を過剰に求める傾向が強まる。また、批判に対して怒りをもって反応したり、他者への共感性が乏しくなるという傾向も見られ、それらは自己愛傾向と名づけられている。教員が困惑する学生の患者への共感性の乏しさや自己中心的傾向は、まさに自己愛傾向の特徴を色濃く示していると考えられた。そして、垣間見える彼らの家族背景や生育歴は、それを裏付けてもいる。そして、学生の自己愛の傷つきは、教員をも巻き込み、教員自身の自己愛の傷つきとアイデンティティの揺らぎを生んでいた。

次に、実習指導の人間関係を、学生と患者と教員のトライアングルという視点から分析した。すなわち、学生を結節点として、学生－患者、学生－教員の関係がそれぞれ対称性をもつことが明らかになった。また、そこから、教員が「人としての自分」を差し出すことの意味を考察した。

最後に、グループとしての「つどい」を分析した。「つどい」では、行き詰った実習指導体験が再現され、「つどい」参加者はその場で無力感や苛立ちを迫体験することになった。しかし、参加者が学生や教員など語りの登場人物にさまざまに「試みの同一化」や「他者化」を図りながら語り合ううちに、ともにその壁を乗り越えていった。その作業を通して、参加者は仲間とともに自己愛の傷つきを癒し、有力化を図ることができたのであり、教員のピア・グループの意義が明らかになった。

論文審査の結果の要旨

専門委員会では、第一に、論文として文章が読みやすく、表現力、構成力とも優れていることが評価された。

また、本研究が、現在、精神看護学のみならず多くの看護教員が悩んでいる、実習における学生との関係をテーマとした点で、タイムリーなものであったこと、とくに実習の場での学生と教員とのインタラクションという、看護教育ならではの困難な局面に着目した点が高く評価された。

また、多くの教員が手をこまねている「難しい学生」の問題を自己愛の傷つきという視点からとらえ、分析を試みたことにより、看護学教育に貴重な視点を提供することになっただけでなく、自己愛の傷ついた学生を指導する教員自身も自己愛の傷つきを体験することになるという発見は、今後の看護学教育のあり方を考える上できわめて重要な示唆を与えてくれるものと評価された。

さらに、学生－患者－教員のトライアングルという視点と、図を用いた説明もユニークであり、これによって患者と学生との間で板ばさみ状態になる看護教員の体験と、その結果起ってくるさまざまな現象をよく理解することができた。また、学生の実習を進めるためにも、教員が「人としての自分」を差し出すことの意味を明らかにした点も重要である。

また、アクション・リサーチとしての本研究の位置づけやピア・グループとしての「つどい」の具体的な方法が詳しく記述され、分析されたことにより、申請者本人が同じ精神看護学教員として参加したことの意味や、「つどい」のなかでどのようなことが起ったのかが、生き生きとしたリアリティを持って示されることになった。そして、「試みの同一化」や「他者化」といったことが、どのように物語の書き換えを促すのかも明快に示され、ピア・グループとしての「つどい」の意義が明確に示されており、説得力がある。

専門委員会では、申請者との質疑応答を行った後、以上の評価に基づき、本論文が学位規則第4条第1項に定める博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあることを認め、「合格」と判定した。